

# 第六十三回神田古本まつりの収穫（一）

土屋 博

令和五年十月二十七日金曜日、滅多に無きほどの快晴の下、コロナ明けの古本市を存分に満喫せり。

東京古書會館の特選古書即賣展の値付けはやや高め也。多くの外國人客（中國語も飛び交ふ）を意識してか英語表記も従来より目立つ。レジ擔當に外國人女性の居りしは、顧客対策の爲なるか。

十月二十九日日曜日、三十一日火曜日、そして最終日十一月二日金曜日に再訪したる分も含めての収穫品は、以下の如し。

## 一「繪入通俗日本政記 全」東京城山稻村子順先生刪補、信陽雪州諏訪白翁先生編次

（協同書房附藏版、明治二十年刊、上三四四頁、中三〇二頁、下二六三頁）

古書價格四百圓也。

署名に「日本政記」との記載あれど、頼山陽の著作に忠實なる内容には非ず。

繪入り頁の中身は以下の如し。神武、神功皇后、仁徳、天智、持統、元正、仁明、宇多、後醍醐、今上（明治）の各天皇。日本武尊寶劔を得て賊徒を誅す。厩戸皇子自ら憲法十七條を作り給ふ。樵夫養老泉を汲んで慈父を養ふ（養老改元のこと）、清麿が誠忠能く道鏡を罵る。應天門の出火樓鳳翔鸞二樓消失の圖（清和帝の御代）。三位博雅月夜怪異に逢ふ

（二條帝の御代）。源保昌巨賊袴垂を懲戒す（後朱雀帝の御代）。源義家夜衣川に貞任を追ふ（堀河帝の御代）。佐々木梶原宇治川の先登（後鳥羽帝の御代）。藤綱が節儉滑川に一錢を得る（後深草帝の御代）。長年帝を奉ぜんと欲して皇居破毀を嘆ず（後醍醐帝の御代）。

正行。義滿金閣寺を創立す。狩に出て道灌始て和歌に志す。上杉輝虎武田晴信川中島大戦争。光秀が逆意本能寺に主君信長を弑す。紫の大徳寺に諸將焼香の圖。秀吉樓上に朝鮮國へ諸將の出帆するを見るの圖。八幡の社に家康湯淺五介首を實檢す。徳川家康入朝の圖。大坂城に秀頼自殺するの圖。伊賀の上野に渡邊荒木河井又五郎を討つ。赤穂の遺臣舊主の仇吉良吉英邸を襲ふ。殿中に於て善左衛門田沼氏を斬る。會藩士等官軍を拒戦す。米國の使節始めて將軍に謁見す。中川の宮敕を奉じて公卿に傳ふるの圖。敕を奉じて有栖川宮東征の圖。官軍大に若松城を攻撃す。

## 二「繪入平假名通俗日本外史」青木東江述

（史籍出版會、明治二十年刊、一五三十一四三十二〇七十三三十二二八頁）

古書價格五千圓也。値段やや高けれど、祭への参加料のいはば御祝儀として惜しくは無しと覺えたる次第。本書も「通俗日本政記」の場合と同様、頼山陽の日本外史に忠實に基づく著作には非ず。

東江漁史、序に曰く、「千儒山陽頼先生、夙著日本外史、以爲闔外一典、然其字句簡奧、文義深遠」、「通俗日本外史、意全倣外史、文體特用通俗、挿間以圖像、初學童蒙之徒、由是畧知治亂之要隆替之蹟」と。

青木東江（輔清）は、「萬國奇談 世界七不思議」、「世界國名盡解」、「横文字獨學」など啓蒙的著作を執筆せり。

繪入り頁の中身は以下の如し。源頼朝、足利尊氏、織田信長、豊臣秀吉、平清盛の肖像畫、鎌倉の權五郎景政目を射られ箭を抜かずして敵を追ふ、樂平重盛と櫻橋樹を七匠して大に紫宸殿前に戦ふ、内大臣重盛誠忠父清盛の悪道を諫言す。常磐三兒を携て雪中に迷ふ、牛若丸鬼一の家にて皆鶴姫の許へ通ふ、牛若辨慶と五條の橋に闘ふ、頼朝空木中に匿れて危難を免かる、平氏の大軍水鳥の羽音を聞て驚走す、平經正仁和寺に至り琵琶を弾じて訣別す、佐々木梶原宇治川の先登を争ふ、義經一鞭して鴨越の嶮を下る、佐々木盛綱密に土人に淺瀬を問ふ、那須與一宗高一發して扇的を射落す、辨慶智弁安宅の新關を脱る、靜法樂を鶴岡の社前に舞ふ、山田重忠嵯峨に至て自殺す、蒙古の大軍雷風に遇て悉く覆没す、小島高德櫻詩を削る、名和長年帝を船上に奉ず、新田義貞寶刀を海中に投じて退潮を祈る、楠正成子の正行に櫻井の驛に訣る、足利基氏新田義興を矢口渡に誘殺す、山名持豊奇計を以て敵の堅塞を破る、畠山政長寡兵を以て相國寺を復す、北條綱成川越城に上杉の大軍を拒ぐ、川中島戦場の圖、上杉謙信親から武田信玄と川中島に闘ふ、平手政秀信長の放縱を諫めて死す、信長怒て悉く叡山を焚き盡す、有親父子尊觀の徒弟となりて難を參河に避く、夏目正吉家康と名乗て討死す、鳥居勝高長篠城の重圍を脱けて使す、明智光秀織田信長を本能寺に弑す、加藤福島等七人賤岳七本槍、秀吉小田原城を指して列營を示す、朝鮮八道の圖、清正朝鮮の太子を生捕りにす、小西行长遼東の大軍を破る、日本勢勇を奮て明の大軍を破る、朝鮮陣中にて大虎を殺す、太閤明の書辭を怒り使者を追返す、日本勢火矢を以て敵城を燒く、日本海軍の將士勇戦して陳隣が兵を破る、鳥居元忠伏見城にて討死す、徳川家康大に關ヶ原に戦て石田三成等の兵を破る、大坂前役之圖、木村眞田等の諸將城中に至て和議を勧めんとす、大坂城中軍議後藤基次異見を陳ぶ、眞田幸村子に訣れて討死す、徳川勢争て大坂城に乗入る。

### 三「實語教畫本 一、二、三、四、五 全」中澤道二翁閱

(合名會社芸艸堂)

古書價格二千五百圓也。

實語教は、平安末期より明治初期にかけての庶民向けの初等教科書なり。以前購入したるポケットサイズのものより大判にて読み易し。明治の復刻、仕上りは美しく、終生愛藏するに足る。

本書の校閲者、中澤道二(だうに)(一七二五年生れ、一八〇三年歿)は西陣織の家。四十歳頃より石門心學を學び、江戸に下る。

#### 四「百人一首註解 完 附作者小傳」凝香園主人編

(博多成象堂、明治廿八年刊、一九六頁)

古書價格三百圓也。序に曰く、「古今幾百千の歌書中、小倉百人一首程廣く民間に流布せる者はなからん」と。九十三番鎌倉右大臣の歌については、「綱手を以て煩惱のきづなどし」陸を以て冥界とし舟を弘誓いの舟とも見たるらし」と。

#### 五「訂正増補 徒然草文段抄 中卷」北村季吟原著

(青山清吉藏版、明治廿九年五版、一二五丁)

古書價格五百圓也。北村季吟(一六二五年生れ、一七〇五年歿)は、松尾芭蕉の師。小生、「徒然草文段抄」については、青山堂版上卷のみと積善堂版全一冊とを所有す。たとへば、百九段「高名の木のぼり」については、『此段やすき所とて心をゆるべて油斷をすればあやまちあり。とかく事にふれて油斷すべからずとのいましめなり。』と。

#### 六「校正古今和歌集講義 上下」加茂眞淵翁講義

(積善館發兌、明治三十年五版、二二四―二六七頁)

古書價格千圓也。

賀茂眞淵(一六九七年生れ、一七六九年歿)は本居宣長の師。

序の部分については、『歌とはいにしへは必ずうたひし物故に云ふ。さて天の下にうまゝるゝ物は人のみならず鳥けだものも蟲も音たてゝ鳴さへづるは皆かれらが心よりうたひ出すなれば人の歌にかはらぬと云ふ也。さるは人として必ずよみうたふべきものぞと下にしへて書けり』と。

#### 七「巽軒講話集 初編」文學博士井上哲次郎述

（博文館藏版、明治三十五年刊、定價金七拾錢、五二八頁）

古書價格二千五百圓也。巽軒（そんけん）井上哲次郎（一八五六年生れ、一九四四年歿）は太宰府醫師の三男。東京大學にて、フェノロサ、中村正直に學び助教授に。その後、獨逸に六年間、ハイデルベルク、ライプツィヒ、ベルリン大學に留學し、帝國大學にて日本人初の哲學の教授となる。のちに東大文科大學長。孝女白菊の詩あり。

「女子教育談」に曰く、『女子は元來女子相應の職務のあるを知らねばならぬ。則ち「スパートホーム」を作ることなり。家庭は國家の大本、社會の基礎なれば、是れより重大なることは他にないのである』と。

「東西洋倫理思想の異同」にて曰く、『西洋のものを取りさへすれば宜いではなく、我にある武士道精神などは宜いから進めればよい。徳川の始め三十年位は混沌の有様なれど、元祿年間に入り宋明の學に對し態度が定まつて來た。明治も初めの三十年は西洋の物を取れ取れとやつたが、今後捨つるべきものは捨つる方針を明かにせねばならぬ。』と。

八「薩摩琵琶獨習」寺尾彭、岩瀬清合著

（東雲堂、明治三十七年訂正三版、正價金拾五錢、一一二頁）

古書價格三百圓也。本書は第二編なれば、有名なるものは少なからん。「千代の春」（かかる目出度き御代なれば、國々所々に至るまで、千代の春千とせの秋と樂しむも、是皆君の惠の深きゆへぞかし）など掲載あり。

九「青年訓」文學士大町桂月著

（博文館、明治四十二年十二版、定價金貳拾八錢）

古書價格千八百圓也。初版は明治三十七年。大町桂月（一八六九年生れ、一九二五年歿。東京帝大國文科卒。）は名文家として一世を風靡す。たとへば、『龜に甲あり、蜂に針あり、牛に角あり、象に鼻あり。これみな護身の利器にして以て自から恃むに足る。世に自から恃む所なき人こそあはれなれ。・・・人の一生の運命の大部分は、僅々二十歳前後の數年間の勉不勉によりて定まる。この際の苦痛を忍んで勉むれば、身に恃む所を得て、將來社會に闊歩するを得べし。』と。

十「今文評釋」文學士内海弘藏著

（成美堂、明治四十五年刊、定價金參拾五錢、二五五頁）

古書價格三百圓也。たとへば、落合直文「萩之家遺稿」、徳富蘆花「自然と人生」、大町桂月「春花秋草」、夏目漱石「草枕」など。

内海弘藏（一八七二年生れ、一九三五年歿）は、東京帝大國文科卒業後、明治大學教授。  
（令和五年十二月二日受附）